

雨ばけ

泉鏡花

作

全一章

あちこちに、然るべき門は見えるが、それも場末
で、古土堀、やぶれ垣の、入曲つて長く續く屋敷町
を、雨もよひの陰氣な暮方、その縣の令に事ふる相
應の支那の官人が一人、従者を従へて通り懸つた。
知音の法筵に列するためであつた。
・ ・ ・ ・ ・ 來かゝる途中に、大川が一筋流れ
る ・ ・ ・ ・ ・ 其の下流のひよろ／＼とした ー
馬輿のもう通じない ー 細橋を渡り果てる頃、
暮六つの鐘がゴーンと鳴つた。

遠山の形が夕靄とゞもに近づいて、麓の影に暗く住
む伏家の数々、小商する店には、早や陀しい灯が點
れたが、此の小路にかゝると、樹立に探く、壁に潜
んで、一燈の影も漏れずに寂しい。

前途を朦朧として過るものが見える。青牛に乗つて

行く。
小形の牛だと言ふから、近頃青島から渡來して荷車を曳いて働くのを、山の手でよく見掛ける、あの若僧ぐらゐなのだと思へばいい。

「……荷鞍にどろんとした桶の、一抱ほどのをつけて居る。……大なる雨笠を、づぼりとした合羽着た肩の、兩方かくれるばかり深く被つて、後向きにしよんぼりと濡れたやうに目前行く。……とき／＼、とうとう、とう、とう、とう／＼。」と、間を置いては、低く口の裡で呟くが如くに呼んで行く。

私は此を讀んで、いきなり唐土の豆腐屋だと早合點をした。……處が然うでない。

「とう、とう、とう／＼。」

呼聲から・風體、恰好、紛れもない油屋で、あの揚もの、油を賣るのださうである。

「とう、とう、とう／＼。」

穴から泡を吹くやうな聲が、却つて、裏田圃へ抜けて變に響いた。

「こら／＼、片寄れ。えゝ、退け／＼。威張る事にかけては、これが本場の支那の官人である。従者が式の如く叱り退けた。

「とう、とう、とう／＼。」

「やい、これ。――殿様のお通りだぞ。・・

・・・」

笠さへ振向けもしなければ、青牛がまたうら枯草を踏む音も立てないで、のそりと歩む。

「とう、とう、とう／＼。」

こんな事は前例が嘗てない。勃然としていきり立つた従者が、づか／＼石垣を横に擦つて、脇鞍に踏張つて、

「不埒ものめ。下郎。」

と怒鳴つて、仰ぎづきに張腕でドンと突いた。突いたが、鞍の上を及腰だから、力が足りない。

荒く觸つたと言ふばかりで、その身體が揺れたとも見えないのに、ぼんと、笠ぐるみ油賣の首が落ちて、落葉の上へ、ばさりと仰向けに轉げたのである。

「やあ、」

とは言つたが、無禮討御免のお國柄、それに何、たかゞ油賣の首なんぞ、ものゝ數ともしないのであつた。が、主従ともに一驚を吃したのは、其の首のない胴姫が、一煽り鞍に煽ると齊しく、青牛の脚が疾く成つて颯と駈出した事である。

ころげた首の、笠と一所に、ばた／＼と開く口より、眼球をくる／＼と廻して見据ゑて居た官人が、此の状を睨み据ゑて、

「奇怪ぢや、くせもの、それ、見届ける。」

と前に立つて追掛けると、ものゝ一町とは隔たら

ない、石垣も土堀も、葎に路の曲角。爽當りに大きな邸があつた。

……其の門内へつツと入ると、真正面の玄關の右傍に、庭園に赴く木戸際に、古槐の大木が棟を蔽うて茂つて居た。

枝の下を、首のない軀と牛は、ふと又歩を緩く、東海道かいだうの松並木まつなみきを行く状さまをしたが、間の宿あひの灯しゆくも見えず、ぼツと煙けむりの如ごとく消えたのであつた。

官人くわんじんは少時しばし茫然ぼうぜんとして門前もんぜんの靄もやにたゞずゐんだ。

「角助。」

「はッ。」

「當家たうけは、これ、齋藤道三さいとうみちざうの子孫しそんでもあるかな。」

「はーッ。」

「いやさ、入道道三にふだうみちざうの一族ぞくで、もあらうかと言ふ事ことぢや。」

「はッ、へーい。」

「む、いや、分わからずよ可よし。……一應おつしら檢らべ

る。　　ー　　とに角いそいで案内をせい。」

しかし故らに主人が立會ふほどの事ではない。その邸の三太犬が、やがて鍬を提げた爺やを従へて出て、一同槐の根を立圍んだ。

地の少し窪みのあるあたりを掘るのに、一鍬、二鍬、三鍬までもなく、がばと崩れて五六尺、下に空洞が開いたと思へ。

べとりと一面青苔に成つて、缺釣瓶が一具、さゝくれ立つた朽目に、大きく生えて、鼠に黄を帯びた、手に餘るばかりの茸が一本。其の笠既に落ちたり、とあつて、傍にものこそあれと説ふ。　　ー　　こゝまで讀んで、私は又慌てた。化けて角の生えた蛞蝓だと思つた、が、然うでない。大なる蝦蟇が居た。

……其の疣一つづゝ堂門の釘かくしの如しと言ふので、巨さのほども思はれる。蝦蟆即牛矣、菌即其人也。古釣瓶には、その槐の枝葉をしたゝり、幹を絞り、根に灌いで、大樹の津液が、木づたふ雨

の如く、片濁りしつゝ半ば澄んで、ひた／＼と湛へて居た。油即此であつた。

呆れた人々の、目鼻の、眉とゝもに動くに似ず、けろりとした蝦蟆が、口で、鷹揚に宙に弧を描いて、

「とう。とう、とう／＼。」

と鳴くにつれて、茸の軸が、ぶる／＼と動くと、ぼんと言ふやうに釣瓶の箍が噓をした。

同時に霧がむら／＼と立つて、空洞を塞ぎ、根を包み、幹を騰り、枝に靡いた、その霧が、忽ち梢から雫となり、門内に降りそゞいで、やがて小路一面の雨と成つたのである。

官人の、眞前に飛退いたのは、敢て怯えたのであるまい……衣帝の濡れるのを慎んだゝめであらう。

さて、三太夫が更めて禮して、送りつゝ、木の葉落葉につゝまれた、門際の古井戸を覗かせた。

覗くと、・・・

「御覽じまし、殿様。・・・あの輩が仕りま
する悪戯と申してはーつい先日も、雑水に此
なる井戸を汲ませまするに水は底に深く映りまし
て、・・・釣瓶はくる／＼とその、まはります
るのに、如何にしても上らうといたしませぬ。

希有ぢやと申して、邸内多人數が立出でまして、力
を合せて、曳聲でぐいと曳きますとな・・・殿
様。ぼかんと上つて、二三人に、はずみで尻餅を搗
かせながらに、アハ、と笑うた化ものがござります
る。

笑ひ落ちに、すぐに井戸の中へ、迂り込みます處
を、おのれと、奴めの頭みましたが、帽子だけ抜け
て残りまして、其を、さらしものにいたしまする
氣で生垣た引掛けて置きました。

その帽子が、此の頃の雨つゞきに、何と御覽じます
るやうに、恁の通り。」

・ ・ ・ ・ ・ と言つて指して見せたのが、雨に澤を帯びた、猪口茸に似た、ぷくりとした茸であつた。

やがて、此が知れると、月餘、里、小路に油を買つた、其の油好して、而して價の賤を怪んだ人々が、いや、驚くまい事が、鹽よ、楊枝よと大騒動。

然も、生命を傷つけたるものある事なし、と記してある。

私は此の話がすきである。何うも嘘らしい。 ・ ・ ・ ・ ・
 ・ ・ ・ ・ ・ が、雨である。雨だ。雨が降る。 ・ ・ ・ ・ ・ 寂しい川の流とゝもに、山家の里にびしよゝゝと降る、たそがれのしよぼゝ雨、雨だ。しぐれが目にかぶ。

【完】